

アメリカ言語学会夏期講座に出席して

田 中 泰 賢

南フロリダ大学に於て米国言語学講習会（6月23日～8月29日）、特別講演会（Chomsky, Fillmore 等）、米国言語学夏期学会（7月25日～27日）、イスパニア言語学コロキウム（7月18日～20日）と共に、北アメリカ記号論コロキウムが7月28日から30日迄の3日間に亘って行なわれた。

以上の報告は美尾・川島両氏（英語青年 昭51-3）、田中泰賢（広島電機大学紀要巻8 昭50）に於て発表された。ここでは記号論コロキウムに関して少し報告します。北アメリカ記号論コロキウムの第1日は、Wellsの「言語哲学と記号論」、Zemanの「Peirceの記号(signs)理論」、Hizの「記号論と論理」、Stankiewiczの「記号論と字義芸術」、Shandsの「記号論と医学」。2日目は、Martinの「記号論と視覚芸術」Agrestの「記号論と建築学」、Nattiezの「記号論と音楽」、Bouissacの「記号論と光景：サーカス」、Metzの「記号論と光景：映画」、最後の日は、Schwimmerの「記号論と文化」、Sebeokの「記号論と非言語伝達」。

これらは実に自然科学，社会科学，人文科学の3分野に及ぶ範囲である。又講習会に於ても，記号論はテーマの1つであり，次の講義が開かれた。Stankiewiczの「言語学と記号論：19世紀と20世紀」，Bouissacの「動作学」，Sebeokの「記号論入門」，Bouissacの「実行芸術の記号論」，MetzとO'Haraの「映画の記号論」。

記号論に於て，Saussureの名前は，言語学的姻戚関係と階層的に高い分野の括がりの象徴として刻まれている。記号論は20世紀の初期にかけて，先ず2つの論文が挙げられる。1つはPeirceの流れを汲むMorrisの「記号理論の基礎（1938）」とSaussureの流れを汲むBuyssensの「言語と談話（1943）」である。Calvetは何故記号科学がSaussure以来進んでいないかと問うたが，Barthesは1956年にSaussureを読んだ後，「記号論の冒険（1974）」を書き，又記号学は言語学の1分野であり，特に談話の大変重要な単一性を補う分野であると述べて，記号論の進歩に大きく貢献した。しかし伝統的Saussure派はBarthesに対する批判をしている。（Mounin（1970），Prieto（1975）等）

Stankiewiczが「詩学と記号論の関係が明確に系統だつ（1923）」と指摘している様に，プラーグ学派の命題の1つに，「芸術行為における全てと，その外界との関連は，記号（sign）と意味（meaning）の用語に於て討論される。」と宣言している。この感覚から，美学は記号論の1分野としてみなされる（Stankiewicz 1974）。1958年にSebeok主宰の記号学会議でJakobsonは「言語学と詩学」と題して，「多くの詩的特徴は，言語科学のみならず，記号理論，即ち一般記号論に属する。」と述べている。

1960年代は，記号論の参加者も多くなり，又その論題も拡がって来ているが，これは主にポーランド記号論者達によって率先されて来た。ポーランドの学者達は，この半世紀，文学理論と同様に言語学に大き

な興味を示して来た。ポーランドにおける詩学の国際的研究グループの発展は、それらの若者と読者：即ち記号論として全ての記号と人間の体系を含む分野に及んでいった。第1回、「詩学諸問題への国際会議」は1960年に Warsaw で開かれた。翌年も同地であった。この後1965年と、特に翌年はユネスコの賛助で記号論学会が、ポーランドの Kazimierz の町で行なわれた。ソビエトでは、記号論の第1回会議が Moscow で1962年に催されている。この報告 (Simposium 1962) は、Ivanov による短かい論文から始まっている。彼は最も評価出来る方法で意味と記号論の範囲を定義している。1973年、世界的記号論コロキウムが Estonia で開かれている (Semiotikë 1973)。1967年に Urbino 大学は夏期セミナーを始めている。この東ヨーロッパの代表的なセミナーは、西ヨーロッパやアメリカとの接触も自由に行って、ユニークな位置を占めている。Paris や Toronto でも記号論サークルを作っている。その他、Bucharest, Budapest (Hoppál 1971), Buenos Aires, Czechoslovakia (Osólsobě 1973), Poland (Pelc 1974), Sicily 等。

最近、特別な記号論トピックを論じる為の色々な会議が開かれている。

- ① 生態学相互作用について (Amsterdam 1970)
- ② 語用論について (Jerusalem 1970)
- ③ 記号論と医学、健康諸問題との関連について (New York 1970)
- ④ 映画の記号論について (Oberlin 1972)
- ⑤ 第1回音楽記号論国際会議 (Belgrade 1973)
- ⑥ Peirce の記号 (signs) 概念についてのシンポジウム (Washington 1975)

その他、いくつかの Peirce の向けた結果について (Baltimore 1975), 第1回 Peirce 国際会議 Stuttgart 1976), ドイツ開業医による記号論コロキウム (Berlin 1975) 等々がある。

Peirce が、曾て示した様に、「全てこの宇宙は記号 (signs) でみなぎっている。たとえ、それが専ら、記号から成っていなくても。」という彼の論に従うと、記号論、記号学理はどこにでも存在するはずである。Eco (1974) の様に、「記号論は科学的態度であり、他の科学の対象を見るのに批判的方法でもある。」記号論は分野というよりも方法論と言った方が良い。Peirce は、「(論理の) 科学の真の価値ある観念は、それが研究の方法を工夫する芸術……方法の方法である。」又1882年に Johns Hopkins は「方法論の時代です。人間精神の生きざまの説明者である大学は方法の大学でなければならない。」と述べている。

記号論は動作学としての特別の分野に迄及び、記号の全歴史哲学的分析の後継 (Morris 1971) ともいわれている。

記号と医学との関係は深い。医学は「症候」や「症候群」と呼ばれる特別の記号を巡る。これらは、順に、しばしば、より基礎的な「布置」、「指標」のようなものと考えられる (Büler によってするどく観察されている, 1965)。これらの呼称は、一般に話し手、即ち患者 (主観的症候) と聞き手、即ち診察する医者 (客観的症候、或いは単に症候) によって異なるということが、症候の特徴である。症候学又は記号学 (Semiology) は Galen によって、先見され、描かれた如く、医学の1分野に発展した。Galen は記号論 (医学の6つの主な分野の1つ) を3つに分けている。

- ① 認識過去
- ② 診察現在
- ③ 予見未来

いわゆる、現時点に焦点を置く診察学、過去における既往歴、未来における予後徴候となる。

1970年には、ポーランドの法律学者（Studnicki 1970）は、「交通記号」の厳密な記号論的観点から、洗練された分析で、その含意に達する為の素晴らしい論文を出した。即ち、道路上の交通の規則と制御（危険信号、指令信号、禁止信号、指示信号）に使われる視覚信号に属する「交通信号」についてであった。音楽記号論は、1970年代になると、進歩している。Nattiez の「遊びにおける音楽、1971」。

Morris が主張した様に、美学は、そっくりそのまま、記号論の下位区分になる。記号理論の用語で、美学に接近することは、意義があるのみならず、統一された科学の全体的プログラムにとっても有効である。

記号論応用の他の例として、映画技術（Bettetini 1973, Lotman 1975 等）や、ダンス芸術（Ikegami 1971）が、ある。

尚、下記の講演を録音致しましたので御利用下さい。

Fillmore, "Studies in Lexical Semantics "

Hoenigswald, "Intentions, Assumptions, & Contradictions in Historical Linguistics "

Nida, "Some New Developments in Lexicology "

Wells, "An Approach to Semantics "

Fishman, "The Sociology of Language "

Davies, "Analogy and Greek "

Shands, "Semiotics and Medicine "

Ferguson, "New Directions in Phonological Theory "

Robins, "Ancient & Medieval Linguistics "

Gamkrelidze, "Typology & Indo-European Reconstruction "

Chomsky, "Syntax and Semantics "

Chafe, "The Remembrance and Verbalization of Past Experience "

Metz, "Semiotics and Spectacles; Cinema "

Posner, "Types of Dialogue "

昭和 50 年 12 月 7 日 脱稿